
名も無きゲーム

プラセオジム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名も無きゲーム

【Nコード】

N2074Y

【作者名】

プラセオジム

【あらすじ】

死神のゲーム

都市伝説でありプレイした人は漏れなく死ぬと噂されるゲーム
ケントはそのゲームと一緒にやろうとやってきた
シヨウはその都市伝説を否定するため了承した

その1

「ねえシヨウちゃん、死神のゲームって知ってる？」

昼休み、弁当を食い終わってすぐ、なんの脈絡も無く突然そんな話題を振ってきたのは俺の友達のケントだった。

「なんだそれは、新発売のゲームか？」

「いや、ゲームには違いないんだけどこれがただのゲームじゃないんだよ」

「ただのゲームじゃないってそりゃ金を払わないとゲームは買えないだろ」

「そついう意味じゃないよ、シヨウちゃん考え方ひねくれてるね」

ケントはそついつておもむろに溜息をつきやがった。

ちよつと冗談を言っただけだつてのになぜそこまで言われなきゃいけないんだ。

「まあ、それはおいといて、死神のゲームってのは都市伝説のひとつなんだけど、どこからともなくそのゲームはあらわれて、それをプレイした人は漏れなく死んじゃうんだって」

ケントは濁り一つない満面の笑みでそんな物騒なことをいいだす。
「さて、少なくともそれが本当だとして、それは笑いながら言うこ

とじゃないだろ」

「なに、シヨウちゃんもしかして今の話信じたの？ そんなこと本当にあるわけないじゃん」

ケントはそういつと今度は声をだして噴出しやがった。

「お前が先に振ってきたから乗ってやったただけだろ、俺は別に信じちゃいない」

そついいながらケントの頭を一発殴っておく。

「いた、ひどいなシヨウちゃんは、でも今確かに信じてないっていったね」

「……だからどうしたんだ」

この話題の振り方は、あまり言い予感はない。

「じゃあさ、一緒にやってみようよ死神のゲーム」

「……さっき信じてないって言ったばかりだろうが、なぜそうなる」
「信じてないって言ったのはゲームをしたら死んじゃうって話だけだよ」

なんて都合のいい解釈なんだ、こいつの頭の中では自分が世界の

中心なんだろうな。

「断る、どうせこの前みたいに、あるかないかもわからん物のために俺を引っ張りまわすつもりなんだろう」

つい先週、近くの山にツチノコが出たらしいから捕まえに行こうとか、根拠のない噂を信じて山の中に引きづられて言っただけの結果はもちろん捕まえられないわけなかったし、山の奥まで行き過ぎて帰り道が分からなく遭難したんだ。

次の日には警察の捜索隊に保護され親にこっぴどく怒られたのだ。

「それなら大丈夫、ゲームはすでにここにあるから」

っと、思っていたのとは違う展開に話が進んできた。

ケントは「ほら、これだよ」と言っただけのゲームカセットを手渡してきた。

それは今ではやってる人はあまりいないであろう何世代も前の家庭用ゲーム機のソフトだ。

幸いそのゲームの本体は家にあった。

ただしラベルが剥がれていて何のゲームかは分からない。

「というか、ただラベルが剥がれているだけの普通のゲームじゃないのか」

「違うよ、このゲームはどこからとも無く急に僕の部屋に現れたの」

ケントは握りこぶしを作って力説した。

「大方、家族がお前の部屋に置き忘れて言ったのだろう、それにいままで気づかなかつたから急に現れたと思っただんだ」

ここらでケントにはしっかりと現実を見てもらわなければ俺が引っ張り回されすぎで過労死してしまう。

「家にこのゲームの本体はないしそれ以前に家の家族はゲームはまったくしないよ」

そういわれてみればそうだった、ケントの両親は頭が固いらしくゲームばかりしているとろくな大人にならないとゲームひとつ買ってくれないとこの前に言っていた。

ケントは親に内緒でゲームを持っているがそれなら本人に見覚えが無いわけではない。

それにケントは一人っ子だから兄弟のゲームって線もない。

「なら、友達がお前の部屋に忘れていったとこだろう」

「……僕はシヨウちゃん以外友達は居ないよ」

「……………」

気まずい雰囲気になってしまった。

「そ、それなら試しにそのゲームやってみようぜ、死神のゲームって信じたわけじゃないけど起動するくらいならいいだろうし」

俺はこの雰囲気に戻すためあわてて話題をかえる。

「だよね、なら今日の放課後ショウちゃんの家に行くね」

ちょうどそういい終わった時、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り響いた。

「じゃあ、放課後行くからね」

ケントはそういうとそそくさと自分の教室へと戻っていった。
俺もさっきのゲームが少し気になりつつも、次の授業のための準備を始める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2074y/>

名も無きゲーム

2011年11月4日07時07分発行